

## 高齢者との交流活動を通して学ぶ豊かな人間性の育成 －学校教育における世代間交流活動－

所属校：東京都立秋留台高等学校  
氏名：鈴木 民子  
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：高齢者との交流・地域との連携・体験学習・コミュニケーション

### I 研究の目的

核家族化が進み、家族でのコミュニケーション不足等人間関係は希薄になってきている。学校はそれぞれの発達段階において人々との交流や様々な活動の機会を提供し、社会の一員としての自覚や思いやりの心をはぐくむことが必要とされる。従って、次代を担う人材を育てるためには家庭・学校・地域・社会が協力して取り組む必要がある。家族・家庭、人の一生や人々の生活について学ぶ家庭科教育における地域連携を取り入れた指導は生徒一人一人が実践を通じた学習をすることにより、これから先の生きる力を育てることができる。と考える。

また、社会の一員としてたくましく生きていくには、人々の中で育ち豊かな人間関係を築く力を身に付けることが重要である。そこで、社会性確立のためには人間関係の基礎となるコミュニケーション能力が必要であると考え、高校生には日常的に接点のない高齢者との交流を敢えて実施することとした。交流相手としては人生経験豊富な高齢者は最適であり、言葉を介してのコミュニケーションを体験することにより、それは自分の身近な人間関係の基礎となることを理解させる。生徒が自らの体験により人間性の育成及び地域社会との関係を築く力を身に付けることができると考える。

本研究では、高等学校の家庭科で、高齢者との交流活動を授業に取り入れ、その活動を通して、生徒にどのような変容がみられるか、また、参加する高齢者の実態、家庭科の現状を踏まえ、学校教育における世代間交流の意義を明らかにすることを目的とした。

### II 研究の方法

#### 1 小中高校生の高齢者観意識調査

人間の成長発達段階において高齢者への意識は相違するのではないかと考え、同学区で学び、活動する小学生、中学生、高校生の高齢者に対する意識の相違を把握し、これらを踏まえて、特に高校生の高齢者意識の特徴を明確にすることとする。調査対象者は、小学校第5学年100名、中学校第2学年116名、高等学校第1学年257名、合計473名である。

#### 2 地域の高齢者を招いた交流授業による生徒の変容をみる調査

高等学校家庭科で、地域に住む高齢者との交流活動の授業を取り入れ、その活動において生徒が得た高齢者理解及び活動への意欲について交流前後の生徒の変容の傾向を捉え、高齢者交流授業が生徒の高齢者理解に与えた影響を明らかにする。調査対象者は、高等学校第1学年241名である。

#### 〈授業内容〉

学校近隣の地域で活動をしている高齢者を家庭総合の授業に招き、生徒7~8名の班に1~2名参加していただき、グループディスカッションを行う。高齢者との会話を進めていくにあたり、生活を知るための質問を事前に準備し、その質問をもとに会話を進めていく。交流授業の効果を上げるため、傾聴スキルの学習や自らの高齢者に対する意識の確認等の事前学習を行った。

#### 3 交流会へ参加した高齢者への世代間交流に関する意識調査

高校生と高齢者との交流会へ参加した33名を対象に、高齢者の日常生活活動の実態や交流会体験をしたことも含めて世代間交流に関しての意見を把握し、高等学校家庭科の高齢者交流の授業の課題を明らかにする。

#### 4 家庭科教諭へ的高齢者との連携授業の実施状況調査

東京都公立の高等学校に勤務する家庭科教諭（専任、講師、再任用、嘱託等）を対象とした調査によって、都立高校にて行われている高齢者との交流活動の実態と問題点、取組への意識を把握し、地域連携と高齢者交流の課題を明らかにする。調査対象校は、2007年度に開校している東京都内の全日制、定時制、中高一貫教育校302校である。回収校数は89校であり、回収率は29.5%である。

以上4調査の結果を分析し、生徒の高齢者理解の深化と共に学校教育における世代間交流の意義及び課題をまとめる。

### Ⅲ 研究の結果

#### 1 小中高校生の高齢者観意識調査の結果

- (1) 交流活動への参加意欲は、小学生が最も高く、高校生が最も低い。高齢者との交流活動へ参加したくない理由は、中学生は自分の問題、世代間の壁をあげ、高校生は人との接触への不安等をあげる。特に、高校生は祖父母との同居意向が低く、高齢者との交流活動への参加意欲も低いことから、交流活動の機会を与えることが重要であると考えられる。
- (2) 総体的に見ると高齢者の肯定的イメージの割合が高く、中学生・高校生より小学生の方が、女子より男子の方が、祖父母と別居の方が同居より、その割合が高い。
- (3) 交流をしてみたい相手について聞くと、高校生は同世代もしくは乳幼児をあげ、高齢者との交流をあげるものは少ない。さらに交流活動をしたくないという意見も多かった。

#### 2 地域の高齢者を招いた交流授業による生徒の変容をみる調査の結果

- (1) 全体の5割以上の方が前に比べてお年寄りのことをよくわかるようになったと感じている。交流会により、高齢者の理解と視野が広がるなど多くのことを学ぶ機会となった。尚、事前の傾聴スキルの学習をした生徒の方が、よりお年寄りを理解するようになった。
- (2) 高齢者との同居希望がある生徒の方が、また交流参加希望がある生徒の方が肯定的イメージが高く、また、交流体験で高齢者を肯定的に受け入れていた生徒は交流への参加意欲がプラスに変化するなど、高齢者と良い交流体験ができる生徒は高齢者イメージを好転することができた。
- (3) 交流活動への参加意欲は体験後に増加する。交流後に参加したい気持ちになった生徒は、高齢者との会話から接点を見出し、自分の在り方を考えたり、周りの人に興味を持つようになっていた。

#### 3 交流会へ参加した高齢者への世代間交流に関する意識調査の結果

- (1) 高齢者の日常の活動の中では高校生と接点を持つ機会はあまりない。調査から、生活時間の食い違い等があり、高校生と共に活動することは困難な状況であることが明らかとなった。
- (2) 高齢者からみた高校生のイメージは肯定的なイメージが多く、高校生との交流に期待している。

しかし、交流の機会はなく、年齢を重ねるごとに交友関係も狭くなることから、コーディネーターの存在、交流場所の検討が必要と感じている。また、高校生と高齢者との交流活動はお互いに理解を深め、意識を高め合う機会として有意義なものであると感じていた。

#### 4 家庭科教諭へ的高齢者との連携授業の実施状況調査の結果

- (1) 地域と連携した教育活動を実施している家庭科教諭も多いが、その活動が家庭科の学習活動として行われているとは限らない。家庭科の学習として地域との連携をする活動を取り入れたものは、選択授業での実施が比較的多く、いずれも学校外へ出向いて行う活動が進められている。この授業は教諭の熱意だけでは実施不可能であり、学校の教育課程全体の中に位置づけられていることが必要である。また、非常勤などの教員の勤務体系によっても可能かどうかが決まってくる。したがって、地域連携の授業は、様々な学校の特色を生かした取組がなされることが必要であると思われる。
- (2) 家庭科の学習活動の中で高齢者との交流活動が行われている学校は総合学科や家政科のある学校であり、全体的にみると数は少ない。家庭科の教師は、授業に交流活動を取り入れる意義を感じ、実施希望はあるが、様々な課題があり、実施までには至っていないことが多い。特に家庭科の授業時数が少ない、2時間続きの授業が組めないなどといった時間に関する課題が多かった。

### Ⅳ 考察

青少年と地域の高齢者が知り合い、互いの人生の豊かさを共有することは重要であるが、都会での日常生活の範囲では、そのことが成り立ちにくい。これらのことを意図的に補うことが必要であり、それ故、地域との交流場面を設けることが求められている。一方、学校にも地域との連携が求められ、また家庭科の高齢者学習では高齢者との交流の必要性を感じている。地域社会で活躍している人々と協力、共存して行くといった地域交流を授業に組み入れることは可能であり、その他の場面でもそれを実現していく方策を立てていくことが課題である。生徒には、高齢者との交流での学びを生かし、自主的な活動への意識を育て、実践していく能力を身に付けさせたい。